

‘Volitionality’ と ‘Responsibility’

——インドネシア語における3種の受動表現 ‘di-’ ‘ter-’ ‘ke-an’——

湯 浅 章 子

“Volitionality” and “Responsibility”

——Three Kinds of Passive Expressions in Indonesian : ‘Di-’, ‘Ter-’ and ‘Ke-an’——

YUASA Akiko

Abstract : There are three kinds of passive expressions in Indonesian in which either of the affixes or markers ‘di-’, ‘ter-’, or ‘ke-an’ is used. In the following report, I would like to show that the difference between these three expressions can be explained quite simply from two points of view, “Volitionality” and “Responsibility”.

The ‘di-’ type expression could be called the “direct passive”, where “the person/people that does/do the action has/have ‘Volitionality’, and therefore there is ‘Responsibility’ in him/her/them, thus the one/ones who receives/receive the action has/have neither of them”. The ‘ter-’ type expression could be called the “spontaneous passive”, where “the person/people that does/do the action does/do never have or hardly has/have ‘Volitionality’, and there is ‘Responsibility’ for the result in the one/ones who receives/receive the action”. And the ‘ke-an’ type expression could be called the “adversative (or damaged) passive”, where “neither the one/ones that has/have caused the result nor the one/ones that receives/receive it has/have ‘Volitionality’ or ‘Responsibility’; just the one/ones that has/have some relation with the result happens/happen to be damaged”.

The grouping of the passive expressions in Indonesian shown above could be adaptable in some way to the structures in Japanese phrases which have similar passive expressions.

要旨：インドネシア語には ‘di-’, ‘ter-’, ‘ke-an’ という接辞やマーカーで使い分けられる3種の受動表現がある。本稿ではこれら3種の受動表現の差異が ‘Volitionality’ と ‘Responsibility’ という2つの観点から簡潔に説明できることを示した。それらの差異は以下の通りである。

「動作をする側に ‘Volitionality’ があり、それ故その事象に対する ‘Responsibility’ も動作をする側にあつて、動作をされる側にはどちらもない」という構造の受動表現が ‘di-’ (直接受け身) タイプ。「動作をする側には ‘Volitionality’ はなく (あるいはごく弱く)、その事象に関する ‘Responsibility’ はむしろ動作をされる側にある」という構造の受動表現が ‘ter-’ (自発的受け身) タイプ。そして「事象を引き起こしたものにもそれを蒙ったものにも ‘Volitionality’ や ‘Responsibility’ はないが、事象を引き起こしたものと何らかの関係を持つ者が事象の結果を蒙ってしまう」という構造の受動表現が ‘ke-an’ (第三者の受け身 (迷惑受身)) タイプである。

以上のインドネシア語受動表現の分類は、類似した受動表現を持つ日本語の受動表現の構造分類にも、ある程度適応できると考えられる。

1. はじめに

インドネシア語には、大別して、‘di-’, ‘ter-’, ‘ke-an’ という接辞やマーカーで使い分けられる3種の受動表現がある。それぞれを例に示せば次の通りである。

‘di-’

Jiro dipukul oleh Taro.

次郎 殴られる によって 太郎

(次郎が太郎に殴られた)

‘ter-’

Menara itu terlihat dari sini.

塔 その 見える から ここ

(その塔がここから見える) (森村, 1996)

‘ke-an’

Saya kematian anak. (私は子供に死なれた)

私 死なれる 子供

これらは日本語では、それぞれ「直接受け身」(di-), 「自発的受け身」(ter-), 「第三者の受け身(いわゆる迷惑受け身)」(ke-an), に類似すると考えられる²⁾。

これらの違いについては多方面から論じることが可能であり、筆者もこれまでに様々な角度から考察してきたが、本稿では、次の2点に着目することによってこれら3種の受動表現(di-, ter-, ke-an)の根本的な違いを簡潔に説明できるのではないかという仮説を立てた。‘Volitionality’ と ‘Responsibility’ という2つの観点である³⁾。

本稿ではこの2点に着目することにより、インドネシア語の3種の受動表現を大きく括る根本的な差異を明らかにする。また、それらと類似した日本語の受動表現「直接受け身」「自発的受け身」「第三者の受け身(いわゆる迷惑受け身)」と対照しながら分析し、日本語の受動表現に対するこの分類の適応についても考察する。

2. 先行研究

上述の2つの観点からインドネシア語の3種の受動表現を考察、分類した研究は筆者の知る限りないが、インドネシア語の3種の受動表現それぞれに関しては様々な先行研究がある。

特に、日本語の受動表現との関連に言及したものと

しては、日本語の「第三者の受け身」とインドネシア語の‘ke-an 受動文’との類似性を示した森村(1992)や、インドネシア語の‘ter-構文’における「受け身」と「自発」の連続性を指摘した松岡(1990)等がある。その他にも‘ter-’に関しては「完了」「自発」「可能」「無作為」の意味の連続性を指摘したGorys(1980), Sitindoan(1984)や、森村(1981, 1996), 佐々木(1982), 正保(1985), バタオネ・近藤(1990), ルシアナワティ(1998)等、多数の研究がある。‘di-’については、インドネシア語の受動文の類型について示した安田(1998)等がある。

3. インドネシア語の受動表現

日本語の受動文は様々なタイプが‘(r)are-ru’を用いて表わされるが、インドネシア語では‘di-’ ‘ter-’ ‘ke-an’ という接辞やマーカーが使い分けられる。そして、‘di-受動文’が日本語の「直接受け身」に、‘ter-受動文’が「自発的受け身」に、‘ke-an 受動文’が「第三者の受け身(いわゆる迷惑受け身)」に類似している。以下にそれぞれのタイプを順に示す。

3.1 ‘di-受動文’と日本語の「直接受け身」

‘di-受動文’は、能動-受動対立をもつ受動表現⁴⁾であり、日本語では「直接受け身」に相当する受動表現と考えられる。

インドネシア語の‘di-受動文’とはどのようなものか、日本語の「直接受け身」と対照しながら見てみよう。

1. Sachiko dipukul (oleh) Jiro.

幸子 殴られる によって 二郎

←Jiro memukul Sachiko.

二郎 殴る 幸子

2. Koji dimarahi (oleh) guru.

浩二 しかられる によって 先生

←Guru memarahi Koji.

先生 しかる 浩二

3. Pada tahun 1511 Malaka diserbu (oleh) bangsa Portugis.

に 1511年 マラッカ 攻撃される によって 民族 ポルトガル

(森村, 1988)

←Pada tahun 1511 bangsa Portugis menyerbu Malaka.

に 1511年 民族 ポルトガル 攻撃する マラッカ

これらを日本語に訳すと次のようになる。

4. 幸子が二郎に殴られた。
←二郎が幸子を殴った。
5. 浩二が先生にしかられた。
←先生が浩二をしかった。
6. 1511年にマラッカはポルトガル民族に攻撃された。
←1511年にポルトガル民族がマラッカを攻撃した。

このタイプの受動文では、インドネシア語の場合も日本語の場合も、能動文で二項述語であった動詞は、受動文でもやはり二項を要求する。

このタイプの受動文は、日本語、インドネシア語とも対応関係にある能動文を持ち、基本的に受動文は対応する能動文と同じ事象を表わしている。動作主の行為は意図的であり、受動文の主語はその動詞の表わす動きから直接的な影響や働きを被っている。

つまりこのタイプは、動作主の‘Volitionality’（意図性）の強い「行為型（スル型）」の表現である。事象を動作主側から見ているのか（能動態）、それとも被動作主側から見ているのか（受動態）の違いにより能動／受動の違いはあるものの、基本的に表わされている事象は同様⁶⁾であって、いわゆる「態」であると言える⁶⁾。

能動／受動どちらの場合にも、事象の生起は動作主の‘Volitionality’と関わっている。動作主の意図によって事象が生起するが、同時に動作主の意図によって事象を生起させないこともできる。それ故、その事象の生起に関する‘Responsibility’（責任）も動作主側にあり、被動作主側にはどちら（‘Volitionality’ ‘Responsibility’）もない。このような構造の受動表現が、インドネシア語の‘di-受動文’であり、日本語の「直接受け身」である。

このタイプの受動文では、日本語、インドネシア語ともに、行為を行なう動作主が（たとえ文中に表れていなくとも）必ず存在しており、事象の生起に関する‘Volitionality’及び‘Responsibility’はその動作主側にあると考えられる。

3.2 ‘ter-受動文’と日本語の「自発的受け身」

インドネシア語には‘ter-’を用いた受動表現がある。

‘ter-’受動文については様々な先行研究がある。松岡（1990）は『要するに ter-他動詞文は受動態または

自発態である』と述べ、この構文における受け身と自発の連続を指摘している。また、Gorys（1980）や Sitindoan（1984）は『ter-には telah selesai dilakukan（受動完了）、spontanitas（自発）、kesanggupan（可能）、tidak sengaja（無作為）等の意味がある』ことを指摘している。

このように受動／自発／可能が連続し、日本人には「自発表現」との共通性から理解されやすいと言われる‘ter-受動文’の様々なタイプ（Gorys, Sitindoanらが示す4タイプ）を以下に記す。

(A) 受動完了

7. Bahasa Melayu dipakai sebagai bahasa pengantar
ムラユ語 使われる ~として 仲介語, コミュニケーション語
sehingga tersebar luas. (森村, 1988)
その結果 広められた 広く
(ムラユ語がコミュニケーション言語として使用された結果, 広く広まった)

(B) 自発

8. Kenji terpesona pada kecantikan wanita itu.
健二 魅せられる に 美しさ 女性 その
(健二はその女性の美しさに魅せられた)

(C) 可能（受動的可能, 自発的可能）

9. Bunyi itu terdengar sampai di sini. (松岡, 1995)
音 その 聞こえる ここまで
(その音がここまで聞こえる)

(D) 無作為（非意図的受動）

10. Kaki anak itu terinjak oleh saya. (森村, 1996)
足 子供 その うっかり踏まれた によって 私
(直訳：その子供の足は私によってうっかり踏まれてしまった)
(意訳：その子供の足を私はうっかり踏んでしまった)

(A)の‘ter-’は受動が完了した状態（例文7. で言えば、ムラユ語が広められた状態）を示している。しかもムラユ語が故意に広められたのではなく、仲介語として使われた結果、自然に広まったことを示している。(B)は日本語でもよく用いられる自発表現である。その女性が健二を意図的に魅了したわけではなく、また健二が望んでそうなったわけでもないのに、健二がひとりで魅せられたことを示している。(C)では、故意にその音を聞こうとして聞いたのではなく、ひとりで聞こえてきたことを示しており、(D)では、踏もうと思って踏んだのではなく、そこに出て

いた足に引っかかってうっかり踏んでしまったことを示している⁷⁾。

(A)～(D)に共通して言えることは〈非意図性〉の構図である。いずれも意図的に行為を行なった動作主はおらず、それ故、対応する能動文がない。これらはどれも、誰かが故意にそうしようとしたわけではないのに自然にそうなった、という成りゆきのナル型タイプである⁸⁾。

これらのナル型タイプでは、動作(行為だけでなく、見る、聞く、心の動き等を含む広い意味の動きを指す)をした者にはそうしようとする‘Volitionality’はなく(あるいはごく弱く)、その事象に関する‘Responsibility’はむしろ、動作をされた側(いわゆる‘Patient’だけでなく、動きを受ける対象を含む広い意味で用いる)にある。例えば例文8.で、健二がその女性に心動かしたのは、そうしようと思図したわけではなく、その女性の美しさゆえにひとりてに心が動いてしまったのであり、例文9.で、その音を聞いたのは、聞こうと思図したからではなく、その音がここまで響いてきたために自然に聞こえたのである。

このように、これらのタイプは、動作をした側に‘Volitionality’が無い(あるいはごく弱い)のに起こり得た自然成りゆきのナル型事象であり、言わば、誰にでも起こり得る可能性があり、起こるべくして起こった事象である。その事象が起こったのは、動作をされた側が、もともとそうされ得る能力や潜在性を内在していたという点において、‘Responsibility’は動作をした側よりも、むしろ動作をされた側にある⁹⁾。

特に(C)は、法助動詞を伴わずに法的意味(～し得る)が付随する点を考慮に入れれば、「受動態」というよりも、むしろ英語等に見られる‘Middle 構文’に類似している¹⁰⁾。

比較のため、法助動詞(bisa=英語のcanに相当するもの)を含まなければ可能の意味を表現できない‘di-受動文’範疇の可能表現(意図的的可能表現)を例文11.に挙げ、その違いを見てみよう¹¹⁾。

11. Masalah ini bisa diatasi (oleh) Taro?
局面(問題) このできる 乗り越えられる(によって) 太郎
(太郎にこの局面が乗り越えられるか)

例文11.の場合は、動作主(太郎)に意図がなければ事象は成立しない。この点においてこの‘di-受動

文’範疇の可能表現は、(C)で示した非意図的タイプの可能表現(受動的可能、自発的可能表現)とは、大きく異なっていることがわかる。

3.3 ‘ke-an 受動文’と日本語の「第三者の受け身(迷惑受身)」

インドネシア語には、共接辞‘ke-an’を用いた以下のような受動表現がある。

- | | |
|--|---------------|
| 12. Taro <u>kehujanan</u> . | ←Hujan. |
| 太郎 雨に降られる | 雨が降る |
| (太郎は雨に降られた) | (雨が降った) |
| 13. Hanako <u>kematian</u> anak(nya). ←Anak(nya) mati. | |
| 花子 死なれる(彼女の子供) | (彼女の子供 死ぬ |
| (花子は子供に死なれた) | ((彼女の子供が死んだ) |
| 14. Dia <u>kedatangan</u> tamu. | ←Tamu datang. |
| 彼 来られる 客 | 客 来る |
| (彼は客に来られた) | (客が来た) |

この‘ke-an 受動文’は様々な点において日本語の「第三者の受け身(いわゆる迷惑受身)」に類似している。以下に、日本語の表現を例に引きながら、簡単に類似点を述べる。

日本語の「第三者の受け身」とは、日本文法事典(1981, 北原他編)によれば、『能動態の文に含まれていない(含みよのない)第三者が受動化によって主語の位置に立つことになったもの(仁田, 1981)』とされている。例えば次のようになる。

- | | |
|--------------------------|-----------|
| 15. 太郎は雨に <u>降られた</u> 。 | ← 雨が降った。 |
| 16. 花子は子供に <u>死なれた</u> 。 | ← 子供が死んだ。 |
| 17. 彼は客に <u>来られた</u> 。 | ← 客が来た。 |

このタイプの受動文(「第三者の受け身」及び‘ke-an 受動文’)は、能動文を構成している共演成分の数に比べて、全く別の(能動文に含み得ない)構成要素の数を一つ増やしている。それ故、3.1で示した‘di-受動文’や「直接受け身」に見られるような対応関係にある能動文を持ち得ない。

また、これらのタイプ(「第三者の受け身」及び‘ke-an 受動文’)は、森村(1992)が指摘しているように、ある独立した事象(例えば「雨が降る」)が起こり、それによってその事象の生起とは別個に存在している第三者(例えば「太郎」)が間接的に利害(多くの場合は被害)を受ける、という意味構造上の特徴

を持つ点も共通している。

松岡 (1990) は、インドネシア語の ‘ke-an 受動文’ を『主体の外 (外界) で何かがその自動詞の表す行為をして、それが心理的、物理的に主体に影響してくることを言い表すもの』と述べているが、このことは日本語の「第三者の受け身」にも共通すると言える。

このタイプの受動文は、主体 (受動文の主語—以下同様) の外での何かの動きや状態 (第一事象) が、結果として主体に影響を及ぼす (第二事象) という二重構造であり、その動きや状態は主体に対して故意に向けられたものではない。即ちこれらのタイプの受動文は、(自然事象も含めて) その事象を引き起こしたのものには何の意図もないのに、結果的に主体に影響を与え、何らかの状態を主体にもたらししてしまう、という受動表現である。

このタイプの受動表現は、事象を引き起こしたのものにも第三者にも共に事象 (特に第二事象) についての ‘Volitionality’ はなく ‘Responsibility’ もないが、事象を引き起こしたものと何らかの関係¹²⁾ゆえに第三者が第一事象の結果を蒙ってしまう、というナル型の受動表現であり、第三者と第一事象の結果を並べて第三者に及ぼされた影響を語る形の受動表現である。

この構文はいわゆる「受動態」とも ‘Middle’ 的な構文とも異なり、第三者と事象 (第一事象) の結果を並べて結びつけた表現である。そして、第三者と第一事象の結果が結びつくためには (即ちこの構文が成立するためには)、その事象 (第一事象) がその第三者にとって「過分」と体感されることが必要条件となると考えられる¹³⁾。

4. ま と め

以上より、3種の受動表現と ‘Volitionality’ ‘Responsibility’ の関係を、簡潔にまとめれば次のようになる。

- ① 「動作をする側に ‘Volitionality’ があり、それ故、その事象に対する ‘Responsibility’ も動作をする側にあつて、動作をされる側にはどちらともない」という構造の受動表現が ‘di-’ (直接受け身) タイプ。
- ② 「動作をする側には ‘Volitionality’ はなく (あるいはごく弱く)、その事象に関する ‘Responsibility’ は、むしろ動作をされる側にある」という構造の受

動表現が ‘ter-’ (自発的受け身) タイプ。

- ③ 「事象を引き起こしたもの (自然現象を含む) にも、それを蒙ったものにも ‘Volitionality’ や ‘Responsibility’ はないが、事象を引き起こしたものと何らかの関係を持つ者が事象の結果を蒙ってしまう」という意味構造の受動表現が ‘ke-an’ (第三者の受け身 (迷惑受け身)) タイプ。

インドネシア語の受動表現は、‘Volitionality’ ‘Responsibility’ の観点から上述の3種にまとめられるが、類似した受動表現を持つ日本語の場合にも、これらの分類がある程度適応できると考えられる。

5. 補 足

インドネシア語の3種の受動表現 (di-, ter-, ke-an) は、上述したように、日本語ではそれぞれ、「直接受け身」(di-)、「自発的受け身」(ter-)、「第三者の受け身 (いわゆる迷惑受け身)」(ke-an)、に類似しているが異なる点もある。異なる点としては、既に示したようにインドネシア語の ‘ter-受動文’ の中には日本語にはない「非意図的受動表現—本稿 3. 2. (D) (例文 10)」が含まれていることその他、インドネシア語の ‘ke-an 受動文’ を日本語の「第三者の受け身」と比較すると、事象を引き起こすのが「自然現象」である場合が顕著であることが挙げられる。以下に例を示す。

18. Akibat gempa bumi, banyak penduduk kehilangan
結果 地震 多くの 住民 失われる
tempat tinggal.

住処

(地震の結果、多くの住民は住処が失われた (多くの住民は住処を失った))

19. Pada musim hujan kami sering kebanjiran.

に 雨季 我々 よく 洪水になられる

(雨季に我々はよく洪水になられる (よく洪水に見舞われる)) (森村, 1992)

20. Kami kemalaman di desa itu.

我々 夜になられる で 村 その

(我々はその村で夜になられた (その村で行き暮れた)) (森村, 1992)

インドネシア語の3種の受動表現と日本語の受動表現とを対照するには、これらの相違点を含めてさらに

詳細に検証していく必要がある。この問題に関しては今後の課題としたい。

本稿は、日本言語学会第126回大会(2003年6月、於；青山学院大学)での口頭発表に加筆、修正を加えたものである。発表当日及び後日、有益なコメントをくださった多くの皆様に心より感謝申し上げます。なお、本稿における不備は無論すべて筆者の責任である。

注

- 1) ここでいう 'Volitionality' とは、Hopper & Thompson (1980) で他動性 (Transitivity) のスケールに関する項目の一つとして示されている 'Volitionality' の概念を引用する。
また、'Responsibility' の概念については、英語の 'Middle Construction' を論じる際によく用いられている 'Responsibility' の概念を引用する。例えば、This book sells well. (この本はよく売れる) という Middle Construction では、その本がよく売れるのは、その本がもともと売れる要素を備えていたからであって「よく売れる」という事象に関する責任能力はもともとその本にあったと捉える場合がある。本稿では、この 'Responsibility' の概念を引用することにする。
- 2) 詳細に関しては湯浅 (2000, 及び 2001) を参照されたい。
- 3) 注 1) 参照。
- 4) インドネシア語では能動-受動対立を有する場合、例文 1~3 にみられるように動詞は 'me-' と 'di-' の形態的な対立を持つ。詳細は湯浅 (2001) を参照されたい。
- 5) 大塚 (1959) 参照。
- 6) 態 (Voice) という概念をどのように定義すべきかについては様々な立場があり、各言語 (例えば英語と日本語) においてかなり異なる概念規定がなされている。特に日本語の場合は、自動詞であっても受動文が形成できる「第三者の受け身」等を含む様々な受動表現全体を広い意味での 'Passive Voice' と捉える立場 (柴谷, 1982 等) も有りえる。筆者も今までに様々な立場での考察を試みてきたが、本稿では敢えて英語等において一般的に考えられてきた「態」の定義を用いながら考察してみた。
- 7) (D) のタイプは日本語にはない。'ter-' の詳細については、Gorys (1980), Sitindoan (1984) の他、森村 (1981, 1996), 佐々木 (1982), 正保 (1985), 松岡 (1990, 1995), バタオネ・近藤 (1990), ルシアナワティ (1998), 湯浅 (2000, 2001) 等を参照されたい。
- 8) スルとナルに関しては寺村 (1976), 池上 (1981) を参照。このことや行為/成りゆき等に関連するインドネシア語関係の研究については、松岡 (1990), 森村 (1996), ルシアナワティ (1998), 湯浅 (2000, 2001) 等を参照されたい。
- 9) 注 1) 参照。
- 10) ただし、英語等にみられる 'Middle' とは若干タイプ

が異なっている。また (A) (B) (D) も様々な点で (C) との連続性があり、(C) のタイプよりは遠いものの 'Middle 構文' との連続性があると考えられる。これらに関する詳細は湯浅 (2001) を参照されたい。

- 11) インドネシア語では「意図的可能表現」の場合は法助動詞 (bisa, または dapat, =英語の can に相当するもの) を含まなければ可能の意味を表現できない (例文 11)。この点が (C) で示したナル型の「受動的可能表現/自発的可能表現」(例文 9) とは異なっている。詳細は湯浅 (2001) を参照されたい。
- 12) 鷲尾 (1997) は、この関係を「関与」と「排除」の対立を用いて説明している。
- 13) 第三者の受け身や 'ke-an 受動文' の多くが「被害」の意味を含んでいるのもこれらの構文が「過分」の体感と密接に関連しているためであると筆者は考えている。この構造に関する詳細は湯浅 (2002) を参照されたい。

参考文献

- 池上嘉彦 1981『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。
大塚高信 (編) 1959『新英文法辞典』三省堂。
北原保雄他編 1981『日本文法事典』有精堂。
佐々木重次 1982「インドネシア語における態の問題」『講座日本語学』10 明治書院, pp. 292-304。
柴谷方良 1982「ボイス：日本語と英語」『講座日本語学』10. 明治書院。
正保 勇 1985「日本語とインドネシア語の受動構文」『日本語学』4号, 明治書院, pp. 35-46。
寺村秀夫 1976「ナル表現とスル表現」『寺村秀夫論文集Ⅱ』(1998) くろしお出版, pp. 213-232。
仁田義雄 1981「態 (ヴォイス)」北原保雄他編『日本文法事典』有精堂, pp. 110-114。
バタオネドミニスク・近藤由美 1990『バタオネのインドネシア語講座初級』めこん。
松岡邦夫 1990『インドネシア語文法研究』大学書林。
——— 1995「インドネシア語の従来の受動態とその問題点」『インドネシア言語と文化』1号, pp. 97-105。
森村 蕃 1981『基礎インドネシア語』大学書林。
——— 1988『インドネシア語購読・会話』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
——— 1992「インドネシア語に見られる間接受動的表現」『大阪外国語大学論集』8. 大阪外国語大学, pp. 19-30。
——— 1996『インドネシア語』大阪外国語大学出版。
安田和彦 1998「インドネシア語のいわゆる「受動」文の類型」『Southern Review』13. 沖繩外国文学会, pp. 13-25。
山田博志 1997「中間構文について—フランス語を中心に」『ヴォイスに関する比較言語学的研究』筑波大学現代言語学研究会編, 三修社, pp. 97-131。
湯浅章子 2000「日本語, インドネシア語対照に基づく受動態に関する一考察—第三者の受け身は有標か」『KLS 20』関西言語学会, pp. 12-22。

- 2001 「日本語、インドネシア語における態と他動性」神戸大学博士論文。
- 2002 「「第三者の受け身」はなぜ「被害の意」を含意するのか—日本語、インドネシア語対照に基づく一考察」『日本語学会第124回大会予稿集』日本語学会, pp. 214–219.
- ルシアナワティ 1998 「インドネシア語における種々の受け身構文について」『STUDIUM』大阪外国語大学大学院院生協議会, pp. 91–109.
- 鷺尾龍一 1997 「他動性とヴォイスの体系」中右実編,

鷺尾龍一・三原健一著『日英語比較選書7—ヴォイスとアスペクト』研究社出版, pp. 2–106.

Departemen Pendidikan Nasional 2001 *Kamus Besar Bahasa Indonesia*, Edisi 3, Balai Pustaka, Indonesia.

Gorys, K. 1980 *Tata Bahasa Indonesia*, Nusa Inda, Indonesia.

Hopper, P. J. & Thompson, S. A. 1980 “Transitivity in Grammar and Discourse”, *Language* 56, Wavely Press, U. S. A.

Sitindoan, G. 1984 *Pengantar Linguistik dan Tata Bahasa*, Pustaka Prima, Indonesia.